

映像カメラマンの伊藤浩美さんに山麓を案内していただくと、ふだん見逃してしまいそうな植物や動物、昆虫、微生物の営みが、目の前にありありと広がってくる。伊藤さんご自身は、サングラス以外のめがねはかけていないのだが、伊藤さんが見せてくれる世界のフィルターを、わたしは密かに、〈伊藤さんのめがね〉と呼んでいた。たとえば、伊藤さんのめがねをかけると、北風吹きすさぶ冬枯れの草原で、ナガコガネグモやカマキリの卵囊、オビカレハの卵塊がしっかり越冬していたり、冬の渡り鳥ベニマシコがそそと飛んでいるのに気づき、そのたしかな生命の営みを目にすることができる。

静まりかえった森林にはいるときも、木にべっとりついた粘菌という生命体に出会い、それが動物と植物の両方の性質をもつアメーバ生体だと知ったり、トビムシという砂粒ほどの土壤生物が、なにが生きがいなのか一時も休むことなく飛び跳ねるのを見たり、倒れた枯木に新しい芽が出て、ふたたび命が蘇える倒木更新を目の当たりにする。野鳥と植物の関係、樹木と小動物の関係、広い生態系と極小地点の関係、寡黙な伊藤さんが、それら無数の関係をポツポツと言葉にしてくれるとき、わたしたちは、自分たち人間もその関係の中のひとつの種にすぎないと、今さらのように痛感する。

あるとき、夕方の空を見上げた伊藤さんは、「きょうは、あの位置に十三夜の月が出るはずだな」と、独り言のようにつぶやき、わたしをおどろかせた。お仕事から、そんなことは当然なのかもしれないが、伊藤さんは、はるかかなたの天体の動きを、まるで仲間の行動みたいに把握している。伊藤さんのめがねは、目だけにかかっているのではない、伊藤さんそのものが、超大型めがねなのだ気づいた。